

ある日、僕は偶然見つけてしまった。冷たく透き通った膜から赤銅色が地面に染み込んでいく光景、切り口は魚のえらのようにぱっくりと割れて、遊びすぎで壊れたマリオネットのように折れ曲がった関節、頭は熟れたカボチャのようにでこぼこだった。下半身がブルーシートで覆われたそれは惨殺死体というやつだった。初めて見る死体、体が吐き気を催すのに反して、思考はやけに冷静だった。

僕たちは普段あらゆる死の悪臭を遠ざけて生きている。人の死体は綺麗な状態にして埋葬するし、魚や動物たちが食肉になるまでの過程なんて知らずとも生きていける。僕は確かに気が付いたのだ。人も例外ではない。そして、僕の仕事はそれらの死と決して無関係ではなかった。

「あなた、知っているの」

死体の隣で座っている少女がこちらを見上げている。彼女は死体を指で指しながら僕にそう訊いた。大きな石が転がっている。おそらくブルーシートが風で飛ばされないようにする為のものだったのだろう。

「知らない、君の知り合いじゃないのか」

僕が訊き返すと、彼女はうーんと唸ったまま死体に視線を戻した。

「早く逃げれば？ ここにいたら危ないよ」

彼女はこの死体について何かを知っていた。ブルーシートで隠されていた死体を見つけてここにいるのだろう。死体が着ている灰色の服の赤い染みが雨に滲んでいく。血まみれの作業着は普段僕が着ているものと同じものだった。

「こいつ『清掃員』なんだな」

僕は今、死に繋がれている。

「そうね」

雨に濡れて重くなった前髪を払うことさえせずに、彼女は淡々と返した。雨の音を突き抜けるような凜とした声だった。

月曜日の朝の目覚めはいつだって最悪だ。今日は特にそうだ。先ほどまで見た悪夢が頭の中をめぐる。薄ら笑みを浮かべた人々が自分を殺そうと地面へ埋める夢だった。黒い靄もやを纏った人々の顔はよく見えない。それでも笑い声と不気味に揃った歯だけは鮮明に覚えている。そいつらが複数人で僕を運び、誰もいない大きな穴の中に放り込んで埋め始めるのだ。もう少しで埋まるかもしれない。そんなときに目が覚めた。最悪だった。悪夢を見たことではない。悪夢だったとしても、目覚めてしまえばただの夢だ。せいぜいびしょ濡れのシャツが気持ち悪いとか、睡眠不足とかの問題でしかない。目を覚ませば胸を撫で下ろし安心に浸りな

がら日の光を迎えることができる。だが、目覚めた後の現実が悪夢より悪いことだつてある。そんな時はどうしようもないほどに「悪夢だつていい。あのまま見続けていられたなら」と思うはずなのだ。

僕は起床してすぐにコーヒーを淹れるとそれを片手に仕事の支度を始めた。灰色の制服もだいぶ慣れた。僕は携帯のメールに目を通しながらコーヒーを飲むと、二人分の朝食を作つて片方にサララップを掛けた。書置きは特に要らないだろうと思ひ、自分の分だけ手早く処理して仕事へと向かった。「回収業務」担当の日は週に二回。月曜日と木曜日。月曜日の朝はまだ慣れない。

「あつ、おはようございまーす」

先月から清掃のペアが変わり新人が入ってきていた。前の相棒だった佐藤さんは寡黙な仕事人だった。僕と同じで望んでこの仕事についているわけではなかったのもあり、仕事仲間としてはこれ以上になかった。金がなくて仕方なくやつているというのをお互い理解していたから、お互い仕事についてあれこれ語ることをしなかったためだ。だが、この新人はよくも悪くも現代的だった。

「行くぞ」

「はい」

新人と一緒に「回収車」に乗り込みエンジンをかける。そこで今日の「回収」担当地区を二人で確認した後、車を走らせた。

「清掃員」の業務には「清掃」と「回収」の二種類がある。清掃とは、そのまま街の清掃活動を意味する。こちらはそれほど大変ではない。問題は「町の清掃」が公務化したことによつて生まれた「回収業務」の方だった。

公務化してからというもの、「清掃員」は景観美保全委員会の管轄になった。「人々の心と一日の活力は町の景観から形作られる。美しき祖国の地と、それを想う健全なる郷土愛は、国民の弛まぬ努力によつて維持されるのだ。そして、その代表として我々景観美保全委員はある。」そうどこかに書いてあつたのを思い出す。事実、景観美の維持は市民的な支持を以てなされている。そして景観美保全委員会の下で実際に働くのが「清掃員」たる僕らの仕事だった。

「回収対象」が見つかるまでは「清掃員」の業務はただ車を巡回させるだけだ。新人は暇そうな様子を隠すことなく隣で手元を見ていた。

「そういうえばヒバリさんはなんでこの仕事始めたんです？」

信号で止まっている間、彼は唐突にそんなことを訊いてきた。僕は職場では下の名前で呼ばれている。苗字はなるべく使わないようにしていたし、呼ばれるのも好きじゃなかった。「僕は他に仕事が無かつたんだ。頼るツテも親戚もいなくて、採用されたのがこしかなかつたんだ」

僕がそう答えると、信号が青に変わったのでその交差点を右折した。すると、すぐに僕たちは今日の「仕事」に遭遇してしまった。住宅街近くに隣接した公園だ。そこが今日の「仕

事場」となる。ここは以前から報告が上がっていたものの、「回収」が完了していないところだった。公園内は至って平和だった。小さな子供を遊ばせている親子、それからデートしているカップルが数組、茂みのあたりにはホームレスたちが集まって過ごしていて、犬の散歩をしているお爺さんと、ジョギングをしているお婆さんなんかも見えた。あつ、いますね。なんてため息交じりに新人が言うのを聞きながら、僕は仕事道具を確認して新人に目配せした。銃のような形状をしたそれは「暗号式」と呼ばれている。先端を押し当てながらトリガーを引くことで起動する。僕はその安全装置を外しながら、車を降りて「回収対象」のもとへ向かった。

「あつオイ待て」

新人がいきなり叫ぶ。手元から顔を上げると、「回収対象」の内一人がこちらに気が付いて走り出していた。

「追うな」

「でも」

「今度でいい」

僕は追っていかうとして新人を引き留めて残りの動かない三人を見た。一人は諦めと絶望に目をつむり何かブツブツと呟き始めた。一人は動かなくなった片足をさすりながらこちらを恨めしそうな目で見ている。もう一人の老人はこの二人を置いていけなかったのだろう。こちらを見上げてこう言った。

「もう少し待ってやってくだせえ、せめてこの冬を乗り切りたいんでさあ」

彼らは春を待っていた。この公園に植えられた桜や梅は毎年見事な花を咲かせると評判であった。近所に住んでいる人と顔を合わせることさえ少なくなった今でも、花見の時期だけは例外だ。しかしその賑やかさの中にこの人たちの居場所はない。それでもこの人たちは生きようとしていた。

「こいつは足が悪いんでさあ、たのんます」

訛りの強い老人の必死の説得を聞き流しながら僕は「暗号式」を彼に向けた。新人の方も安全装置の取り外しに手間取っていたが、すぐに足の悪い方にそれを向けた。

仕事を淡々とこなし、周囲を確認した僕はあの死体のことを思い出していた。あの死体はなぜあんなところにあつたのだろう。市民の誰もあの死体に気が付かず、尚且つ警察に届け出がないとすると、あの死体は一体何者なのだろう。ブルーシートで覆われてあそこに放置されていたとすると何者かに殺された後に隠されていたのだと分かる。しかし死体もホームレスと同様に回収されるべき対象であった。町の清掃区域内であれば尚更見つからないのはおかしかった。あの少女がやったのだろうか。

僕が考え事していると、新人は退屈したのか思い出したように自分の失恋談を語りだした。何回かデートを重ねていた女性に思いを告げたところ見事玉砕したそうで、自分が今までデートにかけていたコストが無駄になったことを嘆いていた。

「マジでへこんだんすよ、いや、いけると思ったんで余計に。もう死んだ方がマシかなって」

新人の失恋話を聞きながら、先ほどのホームレスたちを回収車に乗せる。彼らは暗号式による催眠状態にいた。暗号式を撃ち込まれた人間は体内の電気信号を乱され一時的に意識を失う。強力なスタンガンみたいなもので、公務に携わる人間のみが使うことが出来る。僕たちの仕事は暗号式で眠った恵まれない人達を回収車に収納することだ。暗号式による眠りでは夢を見るのだろうか、ふと思うことがある。よく知らなかった。知ろうとすることに意味もなかった。

「しかし今日は回収量多くないですか？　こういう時って出来高制じゃないのが嫌になりますよね」

新人が呆れたように笑う。

「そうだな」

語気を荒げぬように注意しながら、僕は相槌を打った。怒りそれ自体に価値はない。利用できないものに価値が認められない世界では、怒ることに意味はないし、かといって怒りのエネルギーを利用する術を知る人間は一部だった。もちろん僕は入っていない。いらぬものは廃棄されねばならない。僕がこの社会に馴染めないのは、要らないものの廃棄が決定的に苦手だからであった。

景観美保全委員。それが僕たちの仕事だ。僕らは「美しい景色の為」という大義名分のもと、「いらなくなった人間」を町の景色から消す仕事をしている。「いらなくなった人間」は、社会から排除され、家族から見捨てられ、そして路頭に迷う。そんな誰からも必要とされない人間など目に映るだけで毒なのである。だから僕らのように毒を除く仕事が必要とされる。「いらなくなった人間」はたくさん種類がある。例えばホームレス、親のいない少年、性病にかかった少女、家族から見捨てられた老人、時々赤ん坊も捨てられている。つまり、働くことが出来ずお金も家もない人間だ。いや、人間ではない。少なくとも、この世界では人間として認められない。だから人権で守られることもなければ、怪しげな人権団体に利用されることすらなかった。

「君はこの人たちの人生についてどうだったと思う？」

唐突に僕は彼に尋ねた。今日はたまたまホームレスの集団に出くわしてしまった。だからこうして一人一人眠らせた後に全てを回収車に運んで、彼らの痕跡を「清掃」しなければならなかった。その疲労感が僕に余計なことを喋らせた犯人だった。

「は？　なんでそんなこと考える必要あるんですか？」

僕は外気の寒さと内側の熱の差に苦しみながら作業を続けた。これが最後の一人だ。そう思いながら一人にしてはやけに軽い体を回収車へと運んでいく。

「必要はないよ、ただ考えてみただけだ」

僕は大きいため息をついて彼をジロリと睨む。新人はと言えば鍋や食器、彼らの居住スペースであった段ボールや廃材などをダルそうに片付けているだけだった。時々腰を屈めては、彼らの生活用品を蟻の運ぶ虫の死骸を横取りする少年みたいに見つめている。

「いや、まあこうはなりたくないですよね」

新人はため息をつきながら答えた。たばこが切れてイライラしているのか、片付けの途中で花壇の縁のレンガに腰を下ろしては貧乏ゆすりをする。

「時々いるんすよね、可哀そうだとか言う奴。馬鹿じゃねえかなと思ってて。いやほんと、だって無意味じゃないですか」

「無意味ってたとえばどういう？」

僕は回収車に寄りかかって、木の枝にとまるカラスを見つめた。こちらの廃材を狙っているようだった。

「だって、自分の友達でもないのに何で情をかける必要があるんです？ 偽善でしょ、それ」

「友達なら同情するのか」

「そりゃね、情けは人の為ならずって言うじゃないですか。友達に恩を売っとけば自分も助けてもらえるんで」

現代社会では打算的な思考による人助けは偽善に入らないらしい。いや、違う。自分の為だけに生きる人間が偽善者のレッテルを貼られずに済むのだ。

僕はカラスが諦めて飛び立つのを見送ってから車に乗った。新人は助手席だ。

「なあ、例えばこの町に死体があつたとしてそれを僕たちみたいな景観美保全委員が回収できない、なんてことはあるのかな？」

死体もちろん「人間」ではない。だからもし死体が放置されていたらそれも景観を損ねる物として回収されるはずだった。

「はあ、まあないんじゃないですか。どんな空き地でも地区担当者がだいたい回収してますよ。あつ、でも臭すぎて回収を後回しにすることはあるんじゃないっすか？ 今日も帰つたらすぐにシャワー浴びないと」

新人は能天気そんなことを口にする。頭はすでに帰ってからやるゲームの事しか考えていなさそうだった。

回収車はある地点につくと別の職員に運転を交代する。僕が交代すると車は森の中のゲートを抜けてどこかへ行ってしまった。僕の怒りだけは回収されることはなかった。

人生に痛みは付き物だ。痛みを感じたのならその痛みの方へ進め。逃げるのは恥じゃない。だが逃げ続けるな。それはタカヒコの言葉だった。だから僕は答えを探さなければならぬ。

「お前、いつまでそうしてるつもりだ」

初めて会った時、彼は僕にそう言った。その日の仕事終わりに駅付近の路地裏にある居酒屋に寄った。大きな店じゃない。昼夜慌ただしく行き交う人々の喧騒と、突然の通り雨から逃げるように、店構えはこぢんまりとしていた。入口は狭く、看板に灯る光も鈍く点滅していた。長い間改装もせず経営されている店だった。

「そうしているって、僕に訊いているのか？」

一段高い声で彼に応答した。額に汗が滲む。具体的に何かを言い当てられたわけではない。しかし、鍋の底で焦げ付いたシチューのような罪悪感がどこに残っていて、それが自分を

動揺させていた。仕事帰りは特にそうだった。

「君は上着を着ながら酒を飲むのか？」

席一つ隔てて彼はこちらを横目で見ながら言った。胸の動悸が収まっていく。

「そういうことか、悪かったよ。すぐ出ようと思っていたからついね」

僕がそう言うと、彼は何も言わず机を指で叩いた。それから静かに口を開く。

「酒の時に上着を外しながらない理由はいくつか考えられる。そいつがそれをかっこいいと思っている時、例えば映画に出て来る俳優がそうしていたとかつまらない理由の時、あるいはその上着の下に見せたくないものがある時だ」

僕は恐ろしくなった。よく見ると彼の視線は僕の上着の袖口からわずかに見える制服のボタンに止まっていたのだ。顔はカウンターに向いたまま、旧式の銃口のような視線を横目で投げかけていた。

「なぜ焦る？　そういう規則でもあるのか、あるいは意外にも良心の欠片が残っているとか」

彼は笑いながら頼んだ二つのカクテルの内一つをこちらに寄越した。

「飲めよ、ブルーカラー清掃員。変なことを訊いた詫びだ」

しばらく悩んだ末に僕はそれを受け取った。悩んでいる間に彼は席を立って上着を着てどこかへ去ろうとしていた。

「そんな綺麗な色じゃないよ」

実際僕たちの制服は灰色だった。彼が去る気配を背中に感じながら、聞こえたか分からない程度の声で言った。彼は一瞬立ち止まったが、なにも言うことなくただ扉の鈴の音だけを残していった。僕はただ、渡されたブルーのカクテルを見つめることしかできなかった。

「憂鬱な月曜日」

ふと顔を挙げると、女性のバーテンダーが目の前にいた。

「えっ」

思わず間拔けな調子で聞き返してしまった。

「そのカクテルを訳すとそんな名前になるんです」

ああ、そうですかと力なく返事をする、その女性は「お疲れ様です」とだけ言って別のカウンター客のところへ行こうとした。その背中にふと思いついて声を掛けた。

「あの男の人はここにはよく来るんですか？」

「タカヒコの事？　彼のお酒も取り置いていますよ」

彼女が振り向いて答えた。どうやらタカヒコというのが彼の名前らしかった。彼はこの店の常連なのだろう。

僕は青い液体の入ったグラスを口に運んで一気に飲み干した。焦げ付いた罪悪感を流し込むように。だがアルコールはほんのちよつと喉を痺れさせ、空腹を思い出させるだけだった。仕方がなくなつて、その日は適当に食べ物を注文して夕食を済ませて帰った。それが僕とタ

カヒコの出逢いだった。「人殺し公務」に携わってから二か月目の冬の月曜日。二日連続の雨の日だった。

「おかえりなさい」

家に帰ると、途端に床を叩く音と共に能天気な声が聞こえてきた。廊下の先から少女が走ってくる。

「まだいたのか」

「しばらくはいるよ」

彼女は笑みを浮かべて答える。不思議な目をしている。初めて会った時からそうだ。彼女の瞳は渦のようにうねりながら見る者を取り込もうとする。回転する洗濯機をぼーっとしながら見つめてしまうような感覚に襲われるのだ。

「何？」

彼女は僕に訊き返しながら無邪気に笑うと、僕の行く手を塞ぐように軽やかにステップを踏んだ。

「こっちのセリフだ」

僕は彼女を躲してそのままリビングまで進んだ。あつ、躲された、なんて言って彼女も後からついてくる。

「ねえ」

「何だ」

冷蔵庫の中身を確認する。ラップに包まれたトマト半分とレタス、それから昨日買った惣菜の残り、玉ねぎにバター、あとは調味料ばかりとなんとも殺風景だった。

「明日どこに行かない？」

今日の夕食はどうしようか、とりあえずご飯を炊こう。

「何をしに？ どこへ？」

僕は献立を考えつつ応答した。

「そういうの、恋人には言わない方がいいよ」

彼女のからかうような笑いを背中で聞きながら、トマトサラダとオニオンのバター炒めに合うご飯料理を考えた。

「お前は違うだろ」

僕は居候の胃袋を考えながらメニューを模索した。いや、待てよ、確かひき肉があった。彼女に食べられないものがないか聞くと、うーんと悩んだ後に玉ねぎはちゃんと炒めてねとだけ言った。

「あの死体、残ってるかと思って」

彼女は続けた。僕が死体を見つけた時、彼女は傘も差さないまま死体のそばに座ってただけ呆けていた。なぜ彼女がそんなところにいたのか、あの死体は誰の死体なのか、なぜあの死体は「回収」されないのか、そんな疑問が部屋の中で投げた野球ボールのように頭の中を反

響した。関わってはいけない、という僕の直感が疑問から必死に思考を遠ざけようとしていた。その答えはいずれ誰かが見つけてくれるだろう。そう言い聞かせながら。

「もう残ってないさ」

お米を炊飯器で炊きながら、僕はひき肉にガパオソースを入れてフライパンで炒め始めた。彼女はあの日僕についてきた。僕らがなぜこうして一緒にいるのかは分からない。彼女はただ行く当てがなく、僕も彼女を追い出す理由がなかった。

「そうしたらカフェにでも行こう」

彼女は唐突にそう言い玉ねぎの欠片を一口食べて、レモンを齧った子犬のような反応をした。そして冷蔵庫から牛乳を取り出して、コップに注ぎ始める。

「僕が金を払うのか」

「体で払おうか？」

彼女は牛乳を一杯飲むとまた笑った。それで決着だ。

「あー分かったよ、死体を確認すればいいんだろ？」

僕は嫌々ながら彼女に折れた。その日の夕食は二人でガパオライスにトマトを添えて、オニオンのバター炒めと惣菜をつまんだ。それから彼女は二階で、僕は一階のソファでそれぞれ眠りについた。

その週の日曜日、僕らは例の空き地へと向かった。広大で手入れのされていない場所だ。草が生い茂り人の腰の高さまで伸びて足場と視界を悪くしている。死体を見つけた日、僕は彼女と出会った。心地よい眠りから目覚めた日曜日の朝、外の雨雲と窓を叩く水滴を見て、ふと散歩をしたくなつたのだ。目的も、何の合理性もない散歩。ベージュのコートを羽織つて、道なき道を探した。そして途中、その空き地に辿り着いた。

「ねえ、確かこのへんだったよね」

彼女は空き地に着くなり、夏休みの子供のように草をかき分けて探索を始めた。今日は快晴だ。

「やっぱりないんじゃないか」

僕はあたりを見渡して人の気配がないかを心配した。正直あれをもう一度見たいとは思わなかった。まして人に見つかるうとも思わなかった。

「あつ、いたいた」

彼女は、久しぶりに外で隠し飼っていた猫に会ったかのようににはしゃぐ。僕は彼女が屈んで指さすそれを直視できないでいた。太陽の日差しが目に焼き付く。そこから逃れようと顔を下に向ければ、鼻を突き刺す腐臭と耳にまとわりつくハエの羽音、僕はどうしてここに來てしまったのかと後悔した。彼女はそんな僕を不思議そうに見上げた。しばらくそこで彼女はこれ誰が殺したんだろうね、とか、どうして誰も通報しないのかな、という疑問を口にした。僕はそんな彼女の疑問に答えることなくただ帰ろうと促した。

「あーあ」

彼女は現実から浮遊した別の世界の住人のようだった。



その後スーパーに寄って夕食の買い物をしてから、僕らは夕焼け色のアスファルトを歩いていた。しばらく肉料理は食べたくない。頭に浮かぶメニューは自然とベジタリアンのそれになった。

「なんであんなものを」

僕は満タンの買い物袋を両手に二つずつ持ちながら愚痴をこぼした。

「私、好きなんだよね」

夕焼けの空に浮かぶ雲を見つめて、彼女は呟く。

「何が？」

僕は痺れを紛らわせるように、時々両肩を上げ下げした。

「ああいうの見てるとき、人間誰しもあるんだなって思えるから」

「それは、どういう？」

僕は彼女の声のトーンが錨のように沈むのを感じていた。

「だってさ、楽しそうにいちやくカップルも、それに嫉妬する人も関係ないんだよ。アイドル歌手やスポーツ選手や俳優さんだってそう。ヒステリックなおばさんや、俺は偉いんだってふんぞり返ってる社長も、DVで奥さん泣かせてる旦那さんも、浮気してる奥さんだってみんなみんなあなるんだって」

後ろからでは彼女の表情は分からなかった。でも、きっと彼女の目はどこか遠くに向けられている。彼女の視線は僕の背中を通り抜けて遠くの夕焼け雲のその先にあるものを見ているのだと感じた。彼女はまた続ける。

「そう考えたら楽しいじゃん。どんなに取り繕ったって人間それで終わりなんだよ」

「それって楽しいのか？」

僕は単純な疑問を口にした。

「みんなバカみたい。口では綺麗事言って、逃げられない痛みをごまかそうとして」

そこで彼女の精一杯の強がりには途絶えた。僕は速度を緩めて彼女の隣を歩いた。震える声に小さくなる歩幅、小さく肩を揺らして彼女は顔を下に向けていた。

「だからみんな今を一生懸命生きてるんじゃないか」

僕の口はこういう時に、三流ドラマのセリフに出て来る言葉をなんの情感も込めずに発するのに優れていた。訓練されていたのだ。「みんな一生懸命生きているんだ。希望を持って。明けない夜はないさ」そんな言葉を呪いのように唱えながら僕たちは生きている。だから僕たちにとつての「一生懸命」は「現実逃避しながら」という意味合いでしか使われない。

「今だってそこらじゅうで人は死んでる。貧困もいじめも不正も暴力も。なのにみんな知らないフリして誤魔化してる。娯楽や映画で感動して涙流してそういう痛みを忘れようとしてる」

彼女は泣いていた。ただ静かに涙を流しながら笑おうとしていた。あの死体も、おそらく彼女も、忘れられようとしていた。僕はそんな彼女にかける言葉が見つからずに、ただハンカチを渡した。

「使ったら洗濯機に放り込んでおけ」

そう言っただけでハンカチで顔を覆う彼女の手を引きながら家まで歩いた。道中いろんな人から好奇の視線を送られたが、そんな痒みは僕らの抱える痛みには比べれば問題ですらなかった。僕はまだ彼女の痛みを、彼女があの日死体のそばにいた理由を聞くことが出来なかった。

翌日の月曜日にも仕事帰りにあの居酒屋へと向かった。軽快な鈴の音を鳴らしつつ一番手前のカウンター席に陣取った。

「タカヒコならまだ来てませんよ」

目の前に女性のバーテンダーが立っている。どうやら僕のことを覚えているようだった。口ぶりから察するに、彼はこれから来るのだろう。

「私、ミドリって言ってます。美しい鳥って書いてミドリ。お客さんは？」

彼女がにっこりと笑いかけてくる。先週よりも閑散としている店内は、カウンターの電球と入口付近の間接照明、それからろうそくの火で照らされている。

「ヒバリです」

「ヒバリさんね、今日は何か飲みます？」

そう聞かれて少し悩んでから、

「じゃあこの前と同じやつを二つ、一つは彼が来てから出してください」と言った。

ブルーマンデー  
憂鬱な月曜日ですね。彼女は慣れた手つきでカクテルを作り始めた。軽快なリズムと見と

れてしまうほどの美しい動き、気が付けば透明なブルーのカクテルが出来上がっていた。僕はそれを一口飲んでから、お通しの野菜を口にした。

シーフードパスタを頼んでしばらく待っていると、扉の鈴の音が鳴った。彼は来るなり僕の手元のカクテルを見てにやりと笑った。僕は何も言わず自分の隣の席を手で示した。

「なんだ、仕事でもクビになったのか」

彼は僕の隣に腰を下ろした。

「覚えていたのか」

「今思い出したのさ、死肉に群がる犬のことなんていちいち覚えなない」

そう笑う彼を横目に僕はミドリさんの方を見た。ミドリさんはまだパスタを作っているようだったが、僕の言いたいことが分かっているのか、こちらを見て笑顔を返した。

「飼い犬は死肉に群がらない」

彼に視線を戻しつつそう返した。ペットの放し飼いは現在認められていないのだ。

「いや、飼い主が死体処理を犬にやらせるのさ、犬は餌を与えてくれるなら喜んで尻尾を振

る。そうだろ、ブルーカラー  
清掃員」

彼はまた皮肉な笑いを浮かべて僕を見た。僕は肩を竦める動作をしながら、彼に返事をす

る。

「僕は犬ほど利口じゃない」

「謙遜するなよ、ほかの狂犬どもと違って自分の首に輪っかが付いているのが理解できてるんだ。おまけに飼い主に噛みつけばどうなるかも分かっているときだ。上等な犬さ」

彼がそう言うのと、さつき頼んだシーフードパスタが目の前に現れる。

「臆病だと言いたいのか。『政府の犬』なんて随分と古びた比喻を使うじゃないか」

僕はパスタを手前に引き寄せて言った。

「錆びた町で生まれたもんでね、アンティークと朝食のコーヒーにはうるさいのさ」

そう言う彼の目の前にブルーのカクテルが置かれた。彼は不思議そうにミドリさんを見るが、すぐに理解したのか僕の方へ好奇の視線を移した。

「乾杯」

僕はそう言って、グラスを差し出した。彼もそれに応じる。

「お前は面白い奴だな。その為にわざわざここへ来たのか」

「犬は義理堅いんだ」

そう言い返すと、一瞬の間を置いて彼は笑いだした。僕は隣から伝わる振動で揺れるグラスに手を置いた。

「お前は、気に入った。その様子じゃ仕事も嫌々か」

笑いから醒めたタカヒコはそう言ってカクテルを一口飲んだ。

「まあ、飼い主には逆らえない」

そう返して僕もグラスに口を付ける。

「ふん、なるほどな、腐っちゃいないが腐りかけか」

タカヒコは鼻を鳴らし、値踏みするように顎に手を当てた。僕の答えに、一瞬興が冷めた様子だった。

「肉は腐りかけが美味いというよ」

僕はそう言って誤魔化すようにパスタを食べ始める。

「よせよ、犬の肉なんか食えたもんじゃない」

彼はため息交じりに笑うと、ステーキをオーダーしてもう一度グラスに口を付けた。

それから僕らはそれぞれ別のカクテルを注文して小説や映画、それからつまらない世間話と音楽の話をした。彼は小説より映画、ゲームよりスポーツという人間だった。僕とは真逆のタイプだったが、不思議と音楽と漫画の話はすることができた。世間話はゴシップから奇妙な事件の話まで広がった。

「回収された人間がどこに行くか知っているか」

タカヒコは紙ナプキンで口を軽く拭ってから、マティーニを軽く揺らした。

「安楽死だと聞いた」

僕は、雑談で乾いた口をサウダージで潤してから答えた。

「表向きはな。ただ『保健所』がやってるのはそれだけじゃない。薬品実験や人体実験、あ

るいは臓器の売買、もし若い女なら人身売買だ」

「どこに売るんだ。そんなことして」

ミドリさんが食器を洗う音が聞こえる。閉店時間の過ぎた店内にはもう僕たちしかいなかった。店の天井についている換気口からヒューヒューと空気が漏れる音が聞こえてくる。

「裏社会の組織と国が一部で癒着してるんだよ」

彼が口元を歪ませながら答えた。しかし、彼の目は笑う時でさえ鋭さを失わなかった。

「それは噂だろ」

「その証拠をこれから掴むのさ」

彼は体を少しこちらに向けて、試すような視線で僕を見た。

「君は何をしようとしてるんだ」

僕は彼の迫るような視線に緊張しながら、そこから目を逸らすことが出来ないうでいた。自身が彼の銃口のような目の奥に潜むものを見てみたいと思っただけからかもしれない。

「国家転覆ってやつさ。といつても暴力組織じゃない。政府の不正を暴いて決定的な証拠を晒す」

「まるでマスコミやジャーナリストじゃないか」

僕はそう言って彼の目から視線を逸らせぬまま、グラスを口に運んだ。

「まるでじゃなくてそうなんだよ。ただ、俺たちは今じゃ完全な政府広報機関だ。ヤバイ情報を掴んでも上でもみ消される。情報を掴んだ奴ごとな。本当にこの国を動かしたいなら地下的に別の情報収集組織を作るしかない」

彼は一瞬体を仰け反らせ視線を外すと、またカウンターの方へと向き直った。

「まさか君は」

「お前も俺たちにつかないか？ 防衛策には丁度いいだろ」

彼からそう言われると僕は冷静で打算的な選択肢と自分の内から湧き上がる熱の間で揺らいだ。いまこの期を逃したら精神は永遠に囚われ続けるだろう。それが分かっているながら踏み出せないでいるのは、やはり臆病な自意識のせいだった。

「それは、今は、決められない」

僕は絞り出すような声で彼に言うのが精一杯だった。幸い周りに人はいない。おそらくミドリさんも彼がやろうとしていることは承知なのだろう。だから貸し切り状態のこの店で、彼はこんなことを話しているのだ。おそらくこれは彼にとつても大きな賭けに違いない。僕が彼の側につくなんて保証はないし、彼のことを通報すれば自分の生活を安定させるだけの謝礼は手に入る。そのリスクを承知で彼は僕にこんな話をしているのだ。

「簡単な情報でいい。『清掃員』からの情報のリークが少なすぎる」

彼はマティーニを飲み干してそう言った。何かを願うような視線は僕には向いていない。彼には時間がないのかもしれない。地下活動がいつまでも続くわけがない。彼はもしかすると身の危険が及ぶ段階まで追い込まれているのかもしれない。

「守秘義務を破ると重い罰則が付くんだ。ほとんど『回収』確定になる」

臆病な道化のような戯言だった。自分の中の怒りを認め彼に同情しているにも関わらず、こんなことしか言えなかった。

「なるほど、それを喋るといふことはこちらにつく意思があると見ていいのか」

彼は空になったマティーニのグラスから目を上げると、乾いた笑みを携えてこちらを見た。「逆に言うと、今はこれくらいしか喋ることができない」

僕はそんな彼から目を背けて財布から紙幣を取り出して、ミドリさんと呼んだ。

「まあいい。せいぜい迷え」

彼もこちらに背を向けてコートを羽織った。机には既にお金が置かれている。僕より先に用意していたのだろう。彼は店の出口で一瞬立ち止まると、僕にこう言った。

「人生に痛みは付き物だ。痛みを感じたのならその痛みの方へ進め。逃げるのは恥じゃない。だが逃げ続けるな」

ドアについた鈴の音が鳴る。それが彼の去り際のセリフだった。

家に帰ると、すぐに異変に気が付いた。窓から漏れ出る光が見えなかった。開けたはずのカーテンも閉まっている。家には彼女がいたはずだ。なぜ電気がついていないのだろう。そんな疑問が頭に浮かんだ瞬間、いきなり後ろに衝撃を受けて前のめりになって倒れた。すぐに起き上がろうとしたが、重い何かに腕を押さえられて動けなかった。慌てて首だけ動かすと、月明かりに照らされて白い歯が浮かびあがるように見える。

「おかえりがいつもより遅いじゃねえかよ。心配したぜ、女連れてバックレたのかと思つてよ」

男に押さえ付けられている。後ろから組み伏せられて胸を圧迫されているせいか言葉がうまく出なかった。ただ、自分が尋常でない事態に巻き込まれていることだけは分かった。

「おい、カラス。ダメだ、こいつやっちゃまったよ」

そんな声とともにもう一人、男が僕の家の玄関から出てきて僕の顔を底の厚い靴で蹴った。蹴られたのは額あたりで、頭が仰け反るほどの衝撃だった。

「お前たちはなんなんだ」

蹴られた衝撃で胸の圧迫が緩まり何とか声を出す。

「お前あいつをどこへやった？」

こちらの質問は無視して、蹴ってきた男の方がつまらなそうに僕を睨んだ。

「あの女の子のことなら知らない。あいつが勝手にここに住んでるだけだ」

冷静を装う努力も空しく、言葉を捲し立てる口はどんどん乾いていく。彼らは彼女を追つてここに来たのだろう。だとすれば、目的はなんだ。なぜ彼女はここにいないんだ。男の口ぶり、そして家の様子から彼女がどこかへ行ってしまったことを理解した。

「おい、聞いたかよ。カラス。こいつ童貞だった。女と住んでて手え出さなかったんだと」

僕の話なんて聞く様子もなく、薄ら笑みを浮かべた顔を一瞬で無表情に戻して、男はもう一度僕を蹴った。口の中に錆びた鉄の味が滲む。そして頬のあたりに痛みが遅れてやってき

た。

「おいおい、それは真実かもしれないぜ？ こいつの面見てみろよ。まだ助かりたいって顔だ。度胸もクソもあつたもんじゃない」

カラスと呼ばれた後ろの男がしゃがれ声で笑う。

「何が目的なんだ」

僕はもう一度聞いた。

「あー、分かった分かった。死にたくないのね、はいはい。じゃあまず金払え」

カラスはそう言っ僕を立たせると、もう一人の男に玄関を開けさせて僕を家の中へと押し込んでいった。リビングまでつくつくと、いきなり床に突き放されそのままナイフを突きつけられた。

「大丈夫だ。慌てるな、まだ殺したりしない」

そう言っカラスはナイフを突きつけたまま僕を壁まで後退させた。

「とりあえず金は払う？ 払わない？」

「額が分からない。それに何の金なんだ」

僕は慌ててカラスともう一人の男を交互に見た。もう一人の男は完全にこちらに興味を失った様子でリビングの様子を見て回っていた。

「カラス。最悪この家もらっつておこうぜ。そうすりゃこいつも回収されてわざわざ殺さなくて済むし」

カラスが僕の質問に答えようとすると、もう一人が割って入ってきた。彼は僕の質問など答える気さえないらしかった。

「おいおい、この地区の『清掃員』はこいつだろ？ 忘れたのかよ」

「あつ、じゃあダメか」

男はこちらに視線を向けなまま、至極面倒といった風に大げさにため息をついた。

「よ、悪いな、質問なんだっけか、何の金かって言われればあれだ、使用料だよ。お前も男なら風俗くらい行ったことあんだろ、アレだよ。額はまあ使用料なら数万、延滞料が数百万だ」

カラスの目線は怯える僕の吐息を追うように動いた。見えているのかは分からないが、とにかくこちらを面白がっているようだった。

「僕は何もしない」

「あー、分かったよ。だとしても金は払え、じゃなきゃここで死ぬ」

「なんで殺す必要があるんだ」

僕はとにかく時間を稼いで隙がないかを探した。だが、逃げたところでどうすればいい。もう家は知られてしまった。仕事の都合上遠くに逃げることもかなわない。

「ほら、アレだよ。口止めてやつだ」

「誰にも言わないし、言う相手だっていない」

殺すに値しない相手であること。とにかく彼らにとってのリスクが僕を殺すメリットを少

しでも上回りはしないかと僕は模索した。

「家族くらいいいんだろうが」

「家族もいない」

焦りから生まれた何気ない一言だった。それがいまままで不気味なほどに凍り付いた笑みを浮かべていたカラスの表情を変えた。

「死んだのか」

彼は淡々と言った。

「いや、もともと捨て子なんだ。一度『回収』されても捨て子なら孤児院に送られることもある」

なぜ彼が表情を変えたのかは分からない。同情なんて安っぽい感情を人殺し達が持っているとは思わなかったが、今の僕はそれに賭けるより他なかった。

「僕はずっと一人だ。今までもこれからも」

「おい、カラス、どちらにしても早く殺すぞ。こいつは知っちまったんだ」

あらかた物色し終えたのか奥で退屈そうにしていた男がこちらを見て言う。

「まあ、待てよ。女の居場所くらい聞き出そう」

カラスは男の方へ振り向きもせずに言う。冷たい刃先が僕の首に触れる。

「僕は知らない。彼女がいらないなら勝手に出ていったんだ」

先ほどまでだったら聞いてすらくれなかっただろう。しかしカラスはそれを聞くとやれやれと肩を落として僕に突き付けたナイフを少し下げた。

「フクロウ、先に帰ってる」

奥にいる男はフクロウというらしかった。僕はナイフの向きに注意を向けつつも、体にたまっていた緊張感ごと息を吐きだした。

「あ？」

「こいつと話がしたい。先行つとけ」

フクロウはカラスに言われて少し不服気に僕の方を見た。

「殺さなくていいんだな」

「今はな」

フクロウは舌打ちしてそのまま玄関から出ていった。僕はそれを見てへなへなと壁にもたれて座り込んだ。

「今日のことは黙っているよ。誰にも言わないし、言ったら誰も信用しない。だから何もせず帰ってくれないか」

座りながらカラスに言った。もう沢山だった。自分で言ってる情けないのは重々承知だ。ただ命を危険にさらされればそんなことは些末な問題だと感じた。いや、もしかしたらそうじゃないのかもしれない。こんな時、タカヒコならなんて言うだろう。一瞬彼の顔が浮かんで消えた。

「本当に知らないんだな？」

「本当に知らない」

念を押すカラスに僕はもう一度目を見て答えた。タカヒコの言う通りだった。自嘲すら湧いてこない。勇ましく吠えることを知っても、目の前に鞭を見せられれば途端に利口にならざるをえない。

「俺の連絡先だ。言つとくが、それから辿つて俺を捕まえようとしても無駄だ。女が戻ってきたら捕まえてここに連絡しろ、どうせいつまでも逃げられやしないんだ」

彼は一枚の紙きれを取り出して机に置いた。

「彼女はなんなんだ」

心拍音が耳元まで聞こえてくる。せめてもの抵抗として僕が彼に訊けることはそれくらいだった。

「有体に言えばただの商品さ。なんなら買うか？ 保証書付きだよ」

僕はタカヒコの話の思い出していた。一度回収された人間がどのような末路を辿るのか。

「知らない。彼女まだ高校生くらいだろ。法律違反だ」

僕は警告音のようになりたてる心臓を無視して、強がるように言った。

『保証書付き』だつたつた。あいつに法律は適用されない。法からお前達を守つてやることも出来る」

カラスはそう言つて、僕の抵抗をせせら笑うように見下した。

『保証書』付きつてそういうことか」

カラスの言葉を理解した。彼女が一度回収された人間だとすれば、カラスたちに追われているのも説明がつく。彼女はこの社会にとつて人間ではなく、ものだった。ただ利用され捨てられるだけのもの。

「ああ、逆にばらそうとすればお前が殺されるがな」

一度共犯者になれば僕はもう彼らの事実を暴くことはできない。ただ、代わりとして個人的な幸福と安寧は保証されるだろう。それは彼女にとつても同じことだった。ここで僕はある想像をした。あの日見た死体のことだ。あの死体が彼女の「元買い取り手」だとすれば、彼女は彼からひどい仕打ちを受けていたのかもしれない。そして、殺してしまつたのではないか。そうなれば彼女はやはり行く当てがない。僕はそんな想像を働かせた後、タカヒコのことを思い出していた。

「僕を殺せばお前たちだつてリスクを背負うだろ」

「バレやしないのさ、特にお前みたいな『清掃員』はな」

カラスはそう言い残して、僕の前から姿を消した。呆然自失な僕は彼が玄関から去つたのか、窓から出ていったのかさえ覚えていなかった。ただ、名前も知らない少女が消えたこと。カラスに歯向かえば僕は死ぬということ。それだけは確かだった。嵐のようにいろんなことが過ぎ去つた後のリビングを見渡す。一人で暮らすには広すぎるリビングが、今日は恨めしかった。



「例の話だけど、僕はやめておくよ。他に適任がいるだろうし。でも勿論、誰にも言わない。それは約束する」

タカヒコの目を見るのが怖かった。その週の居酒屋の店内は、澄んだ夜の空気が運んで来たのか客足がかなりあった。

「何かあったのか？」

しばしの沈黙の後にタカヒコは静かに言った。水面に広がる波紋のように静かな声だった。しかしその言葉は、店内の雑音の海に沈みこむ重さをもって僕の中へと入っていった。僕はサウダージのグラスを揺らし、沈黙することしかできないでいた。

「なるほど、何かあったわけだ。脅されたのか、買収されたのか、はたまた両方か。つくづく利口な奴だよ」

彼は大袈裟に手を後頭部へ添えて仰け反ると、手にマティーニを持ちながら水槽の金魚を見るような目で僕を観察し始めた。

「そんなじゃない」

僕は否定した。しかし強い否定の言葉さえ、彼の前では委縮して届かないように感じた。この期に及んで僕は彼と敵対することさえ恐れていた。

「なるほど何か人質でも取られたのか、分かった。そいつごと助ける策を考えよう」

周りで誰かが聞いているかもしれない。そんなことを心配する僕の肩に手を置いて、彼は言った。

「やめてくれ、僕には何もできない」

僕は彼の手を振り払うこともせず、ただグラスに視線を置いて言った。

「ああ、その通り。そう自分で言ってしまうところがまさに卑怯だ」

彼の指が僕の肩でリズムを刻み始める。

「僕以外にもいるだろ」

「いや、お前くらいしかない」

彼はため息をついて僕の肩から手をどけた。

「そんなことはない」

気が付くと僕はどこにもぶつけようのない苛立ちを言葉に込めていた。彼への、ではない。僕自身への、だった。彼もまた失望と悲しみが入り混じった表情をしていた。

「分からないやつだな。お前みたいな奴がやらなきゃ話にならないんだ」

彼はため息交じりに空のグラスを見つめた。僕も自分のグラスに残った僅かな半透明の液体を眺めた。

「君に何が分かるんだ」

僕がそう言うと彼は小さくため息をついて、そして空のグラスに口を付けてカウンターの奥を見つめ始めた。そして彼は

「分かったよ。もういいさ。君がそんなにつまらない奴だと思わなかった」

と独り言のように言う。

「僕は見世物じゃない」

僕がそう言うと、彼は立ち上がってグラスを置いた。グラスをただ置いたにしては重い音が響く。

「両方を取る手立てを考えようかもしれないお前に心底うんざりしたよ」

彼はそう言い残して、勘定を済ませ上着を羽織った。隣の二人組から今週見た映画の話が聞こえてくる。主人公の仲間が、自分が助からないことを悟って味方に攻撃させるシーンについて女性二人が話していた。その奥の男三人組は浮気がバレて大変な一人を他の二人が慰めている様子だった。僕が他の客の話を聞いている間に彼は着替え終わっていた。

「そんな都合のいいものがあつたら初めからそれを選んでる」

呑気な他人の話を背にして帰ろうとする彼に、僕は呟いた。

「いや、違うね」

彼は出口の直前、後ろを向いて僕を見下ろして嗤った。カラスたちの凍てついた笑みとは違う。燻っている火種に息を吹きかけるような嗤いだった。

「怖いさ、お前は。自分の心の痛みが怖いんだ。だから誰かに決めてもらいたがっている」  
すべての雑音が去っていく。「逃げ続けるな」という彼の言葉をまた思い出していた。心臓の左心室のあたり。彼の言葉がその奥で反響しているように感じた。

「逃げ続けられやしない、どのみちな」

はっとして振り返ってもそこにはもう誰もいなかった。彼は雑音の中に空のグラスだけを置いていった。

翌日の朝、カラスからのメールが届いてきた。清掃員が普段使う連絡系統から流れて来たものだった。昼の十二時、都内のオフィスビルの一室に來いとのことだ。仕事があると伝える、彼はその心配はないとにかく来るようにと僕に言ってきた。

「今のうちに契約内容を決めたい」

僕が部屋に着くなり、彼はそう言った。部屋は見たところ何か事務作業をする場所のようだった。そこまで大きくはない。彼は事務机の内の一つに陣取って僕を待っていた。

「少し待ってくれないか」

「いや、待てない」

彼は即答した。このオフィスは彼以外もいるのだろうか。しかし、彼の組織の全員がここを使っているとは信じられなかった。拍子抜けするほどに普通のオフィスに見えたのだ。「おいおい、通されたのが普通のオフィスだからって驚くなよ。ヤバい奴らが明らかにヤバい部屋使つたら目立つだろうが」

カラスはオフィスを落ち着きなく見渡していた僕を見て笑った。

「昼が終われば他の奴らが戻ってくる。早くしろ」

足を机の上に放り投げると、彼は少し声を荒立ててそう続けた。

「一週間で良い」

僕はまだ決めかねてそう答えた。彼の追求から逃れるように、僕の目は窓のブラインドを上から順に数え始めていた。

「そう言って逃げだしても無駄だ。分かっているんだろ」

彼は煮え切らない僕を苛立ちの混じった目で見つめながら、犬を撫でるような声で脅してみせた。僕は仕事先に連絡を入れていない。しかし、彼は心配ないといった。それが何を意味するのか、単純なことだったのが確かめたくはなかった。とにかく僕に分かるのは、僕は仕事場に連絡をすることも助けを求めることも出来ないということ。彼の機嫌を損ねれば、僕は仕事を失うということだった。

「じゃあ三日でいい。三日後まで返答を待つてほしいんだ」

僕はなんとか時間を作り出そうとしていた。何のために？ 本当ならカラスの言うことにはただ従っていれば良かったのだ。彼が見せた束の間の同情心がなくないうちに少女を買い取って、二人で静かに暮らせばいい。少なくとも、良心のない人に引き取られるより彼女にとつてもいいはずだ。僕は彼女に何もするつもりはない。他の傷はただ目を背けて忘れてしまえばいい。自分が回収していく人々を忘れ、彼女だけを救う。その矛盾を許すことこそ、賢い生き方なのだ。そんな停止した思考から生み出された言葉たちが、都会の雑踏のように頭の中で響いてくる。

「金か」

「それもある」

カラスはまたあの時の目と声に戻りつつあった。初めて会った時の冷たい笑い。至極つまらないという表情だった。

「分かっているみたいだな、あいつを助けたいならせめて『優しい』お前さんが買ってやることだ」

カラスの「優しい」という表現を聞いて、僕はタカヒコの言葉を思い出していた。僕の優柔不断は優しさゆえではなかった。それはカラスもタカヒコにも見抜かれている。

「分かっている」

僕はそう言ってカラスをもう一度見た。分かっている。もう一度口の中で呟きながら、その言葉を噛みしめる。

「……三日だ。それ以上はない」

カラスの言葉に僕はただ黙って頷く。カラスは席を立ててブラインドの前に立つと、背中を向けたまま、この後空いているかと訊ねてきた。仕事があれば何もなかったし、嘘をつく理由も見当たらなかった。それで仕方なく僕は暇だと答えた。するとカラスは良い所に連れて行くこうと言い出し、部屋の隅に掛けてあったコートを羽織り、帽子を被った。僕は断る理由を考える暇すら与えられず肩をグイッと押され事務所の外へ出ると、そのまま彼について行かざるをえなかった。

彼は裏路地を何度も曲がって、表の光も届かなくなったところで突然現れた怪しげな扉から地下に降りていった。

「ここは……」

路地を二つ曲がったあたりから、壁の色に明らかな変化が見られた。真珠のような乳白色から青白いカビのような色に変化していた。高いビルの隙間から流れ込む日差しが夜の街灯のように道筋を示している。霧に包まれたような見通しの悪さは空気の悪さか、埃のせいかは分からなかったが、とにかくまるで別世界に紛れ込んでしまったと感じながら、僕はさらにその先の地下へと進んだ。

「回収者ですら知らされてねえだろ、私有地は基本対象外だからな」

回収者は私有地には入ることができない。どうもあの路地を二回曲がった先からは私有地として登録されているようだ。そしておそらくこの先も。

「ここが俺の領内になる。まだ小さいがな」

階段を下りていくのは底のない沼に足を浸していくような感覚だった。そして沼が丁度胸のあたりまで来た時、僕は底に足がついた。金属の軋む音とともに光が流れ込んでくる。カラスが開けた扉の先には地下街とでもいうべき商店の集まりがあった。商店というにはあまりに非合法的な商品だった。表の市場では到底流通できない類の。しかし取り締まられていないことを考えれば、ここは黙認された吹溜りなのかもしれない。

「地下街か」

「文字通りのな」

カラスは饒舌にこの地下街について説明し始めた。

「元は大昔に潰れた地下鉄の駅だ。今じゃ世の中も便利になりすぎたからな」

「買収取ったのか？」

僕の質問にカラスは答えなかった。ただ、ふっと笑って僕を一瞥しただけだ。想像に任せるとでも言いたげだった。一軒のパブに入った。店は昼間だというのに騒がしかった。僕は店にとつてもこの町にとつても、吐き出されるべき異物だった。カラスのおかげで、僕はかろうじて吐き出されずに済んでいた。何かを少し間違えれば、例えばボタンの位置とか、コートの皺具合とか、そういう偶然で僕は簡単に死んでしまえるだろう。店内に入るとすぐ、カラスは僕を放って店の住人と何やら話を始めていた。

突然、大きな怒声とも奇声ともつかない声を発し入ってきた大男が従業員と思しき女性の肩を掴み店の奥まで連れて行ってしまおうと、座って酒を食らっていた小男が大笑いして隣の男の頭にパスタをぶちまけ、その隣では男女の修羅場という名の三文芝居の末、クスリの打ち合いがはじまり、店の奥からの嬌声を皮切りに黙って酒を飲んでいた三人組がパスタを鬢にしていた男女四人組に啖呵を切り始め、それをバックグラウンドミュージックにヤク中男女が裸で騒ぎ始めた。それらがまるでルーブ・ゴールドバーク・マシンのように不規則に連動していくのを、僕は教会での讚美歌のようにお行儀よく聞いていた。冬眠中のリスのような心臓を抱えて立っていると、まるで自分自身が入口付近の柱の一部であるかのような店の中の人々はそれぞれが別のことに注意を向けながら、それでも僕を監視しているかのような気がした。少しでもこの場の空気にそぐわない行動を取れば、満場一致で有罪の判決が

下り僕は下水へと流される。こんな裁判をするためにカラスは僕を連れて来たのではないかと思うほどだった。

「あの席で食うぞ」

あらゆる喧騒が監視ドローンの駆動音に聞こえ始めた頃、カラスは僕に声をかけた。僕の体は既に干しブドウのように縮んでしまった頃だった。彼はソファに、僕は背もたれのない椅子に座った。怒る間もなく席に通された僕は、並べられた各種の酒をカラスが注いでいく様を見学した。

「お前も好きに注げよ」

カラスは三つ目のグラスに注ぎ始めた頃にそう言った。動かずにいる僕を彼なりに気遣ったのだろう、僕はいらぬとも言えずあらかじめ半分くらいに減っていたワインボトルを選んで注いだ。カラスはそんな僕を見て笑うと複数の酒を並べて不規則に飲み比べ始めた。僕もワインを飲んだ。何も言わず、僕はただグラスを揺らし規則的に口に運ぶ動作を続けた。

「なんで黙ってるんだよ」

彼はポツリと言った。彼の前髪で目元は分からない。歪んだ口元には浮かび上がるような白い歯を覗かせている。

「いい店だ」

「そうじゃない」

カラスは呆れたように背もたれに寄りかかると、大きく足を組んでみせた。長年連れ添った子分のようにソファの背もたれと肩を組んでいる。

「お前が聞きたがってることだ。ただし答えられないことを質問したら身の保障はしない。この奴らは詮索されるのが嫌いだからな。ちなみに俺は拳闘観戦が好きだ」

店内では、さつき起きた喧嘩が終わったところだった。小男とその連れのパスタの男がのされていた。三人組うち二人はパスタ男を取り押さえて、一人は小男の手からナイフを取上げた。そして店のカウンターの男に何やら言うとそのまま外へと出ていった。残された女性二人は何やら話しながら携帯を眺めて時間を潰しているようだった。店内はさつきより静かだった。僕が何か不用意に言えばそれを誰かが聞き咎めるかもしれない。それから起こることに關してカラスは責任を持つ気はなさそうだった。

「僕を殺さなかったのはなぜだ」

「いつでも殺せるからな」

僕は彼の目を窺った。軽く言っているみたいだが目の奥は冷酷に光っている。彼は本気にすんなよと笑って僕の肩を叩いてきた。

「俺も孤児院育ちだ」

僕は口に運びかけた空のグラスを机に置いた。彼はまだ反応を窺うようにこちらを見て来る。

「『力のない奴は生きる資格がない』それは毛が生えるより前に習うことだ。そうだろ？」

「僕は習わなかった」

「だが知ってるはずだ」

彼の笑いはまるで喉の奥に住んだ別人が出したようにくぐもっていた。

「君の目的はなんだ」

「あえて言うなら楽しさだ」

彼はまた仰け反ってソファに浅く座り直したかと思うと、また前屈みに姿勢を戻した。

「お前にも楽しみ方を教えてやる」

彼の目が獲物を狙う肉食獣のように鋭くなった。それから彼が話した内容を僕はあまり覚えていない。彼の話した計画は僕が関わったところでどうしようもないこと、同時に無視できないほどに心の動揺を深めるものだった。彼が話している間、店内のあらゆる物音が膨らんで消える気泡のように感じた。喧嘩で一度静まったはずの店内は、何もなかったように活気と若干の五月蠅さを取り戻していた。いや、先ほどの騒ぎさえその呼吸に取り込まれていた。

「餌につられて来た奴らを全員狩る。そこからは楽しいロマン・ノワールだ」

彼の計画は、社会暗部と権力の腐敗を嗅ぎまわる組織を毘にかけ一網打尽にするというものだった。僕がタカヒコのことを思い出したのは言うまでもない。彼が喋る計画はどこどころぼかされていたが、僕はその件にタカヒコが関わっていることを確信した。彼の語る組織の中心人物の特徴がタカヒコのそれと類似していたためだった。

「お前も見に来るか。閲覧料はいらさないぜ」

彼は空になったグラスにウイスキーを注いだ。飲む順番も不規則なら、注ぐ酒の種類も不規則だった。

「僕には関係ない」

「そうはいかない。やつらはお前ら清掃員を嗅ぎまわっている。いずれ場所も突き止めるさ。そうなればお前たちだって無関係じゃいられない」

僕は彼の言葉を聞きながら、グラスの湖面に視線を落とした。そこらしばらく僕たちは無言だった。酔いが回ってきたせいかな、僕は別の世界を覗き込むようにグラスを覗き込んでいた。

そんな時だった。「こんなのはどうだ」と言ってカラスは人差し指を立ててそのまま僕の額へと押し付けてきた。いきなりの事に酔いも醒めていく。僕は突然の事故に気が付いた居眠り運転手のように慌てた。

「どんな美もどんな善も、その反対がなくちゃ成り立たない」

爪が額に食い込んでくる。それに呼応して僕はだんだんと後ろへ仰け反っていく。指にはそれほど力は込められていなかった。彼の囁くような演説、あるいは演説のような囁きに、僕は気圧されたのだ。

「美しいとは醜くないこと、善は悪ではないことがその成立条件だ。なら醜さも悪もなくなった世界なんて、何が美しく何が善いことか分からなくなると思わないか」

彼は指を僕の額から離して、胸元を探った。

「俺たちはブスを知ってるから誰が美人かが分かるんだ。凄惨な犯罪を知っているから人助けが素晴らしいと思えるんだ。初めから美人しかいない世界なら俺たちはきっと何が美人かなんて分からなくなる。誰も罪を犯さない世界なら道徳だって要らなくなるのさ」

カラスはそう言うライターと煙草を取り出して啜えた煙草に火を付けた。

「何を……」

「お前は他の何者でもないからお前なんだ。比べる誰か、比べる何かがいて初めてお前はお前でいられる」

彼は煙草を口から外し紫煙を吐きつつそう言った。

「何が言いたいんだ」

「ヒーローショーにはヒーローだけじゃなくて悪役が必要だってことだ。ヒーローだけの世界なら誰もヒーローじゃなくなる。そりゃもはや一般人だ」

今度は人差し指ではない。火のついた煙草だ。僕の鼻先に触れるかどうかの位置で、赤い火がゆらゆらと揺れる。

「だから何が……」

「俺はヒーローショーが好きだってことだ」

彼は煙草を再び啜えると、ソファに勢いよく倒れ込み、そのままの勢いで仰け反って店内の方を見た。それから体を左右に振ってストレッチをしたかと思うとまた僕の方を見て不気味に笑った。

「君はなんでこんな話を」

「殺す手間を省くためだ」

そう言って眉間に皺を寄せながら煙草を灰皿につつ込んだ。僕の顔を少し見つめ、小さく舌打ちをしながら煙草をもみ消した。彼は本当に僕に同情的なのかもしれない。

あるいはこれならどうだとも言いたげに、しばしの沈黙の後に彼は再び語り始めた。

「普段使ってる洗濯機とそれを発明した人間に敬意を払うか？　そこにあるから使う。便利だから使う。それだけだ。幸福な生活を支える技術に無関心なように、犠牲を払ってまで世の中を良くした人間の努力も、その犠牲も結局は忘れ去られる。自由がなかった時代に自由を求めた努力も、そしてこれからの努力も無意味だ」

僕は彼の言葉にひたすら沈黙した。沈黙するしかなかった。反論できないわけではない。彼が正しいとも思わない。ただ彼が僕に語る理由に、僕は何かを懸けて語り返すことが出来なかった。

「こんな世界楽しまないでどうする。どこかで誰かが苦しんでる。誰かが犠牲を強いられる。ああそうさ。だがそれがどうした。そんなもんみんな忘れて愛や憎しみに生きるんだ。それでいっぱい真つ当な人間ぶれるってもんだ。小さな苦しみに目を向けるってのは、正しかろうが無駄なんだよ」

「孤児院では習わなかった」

僕が言えたことはただそれだけだった。

「でも、お前なら分かるはずだ。俺たちはそもそも間違ってるんだからな。不正を正すなんて思わないことだ。そんな誇大妄想はマゾな自殺願望者の麻薬なのさ」

それから僕たちはしばらく関係のない世間話をした。周囲の視線、特に僕に向けてのそれはどうに好奇の視線から敵意の視線へと変わっていた。カラスと一緒にいたところで結局、僕は異物だった。だから僕は埃がかぶったようなゴシップの話をしながら気配を消していた。「お代はいくらだ」

やがてすべての話が尽きて僕は降参するように小声で言った。

「待てよ。お前に『買い物』を教えてやる」

立ち上がった僕に、彼はソファに体を預けたまま顔だけをこちらに向けた。

「いらぬ。お金もそんなに持ってない」

僕は多めにお札を取り出してそれを机に置いた。もう僕は彼の目を見ていたくなかった。

「貸してやる、つけとけ」

脅すような口調だった。

「大きな額は借りない主義なんだ」

「貸してやるって言ってるんだ」

今度はもつと直截な脅しだった。だが、彼は同時に何かに焦っているようでもあった。彼は確信が欲しいのかもしれない。その証明として僕が必要なかもしれないなかった。

「明日の仕事は大変なんだ」

僕は店の奥から乱れた衣服と共に出て来た男女を横目で見やりながらそう答えた。

「せいつらはどうせ『不良品』だ。前の持ち主がな、『壊しちまった』んだ。乱暴な奴だったからな。クスリが合わなかったんだろ。もうどのみち使い物にならねえ、清掃員と警察に見つからねえように捨て場所を教えてやる。空き地に偽装してある。簡単にはひっかからねえ」

今度は挑発するような口調だった。僕は一度出かかったため息を静かに飲んで、カラスを見た。カラスは僕の沈黙を面白がっているようだった。頭のどこかでは分かっていたことだ、カラス達のやっていることがどういふことかなんて。けれど認めたくなかった。それは正義感なんて言葉で表せるほど良いものじゃない。ただの潔癖症に過ぎなかった。

「まさかそれも私有地なのか」

僕は質問することでせめて何か、自分の弱さに反抗しようと試みた。

「書類の上はな。でも見た目は空き地だ」

僕の反応が面白くなかったのか、カラスが一瞬目を細める。

「空き地なら簡単に人が出入りする」

「ああ、この前見たら柵がなくなってたな。また立て直した。それに埋めて隠せばまず見つからねえ」

カラスは宿題を忘れた学生のように目を逸らした。

「埋めないこともあるのか」



「フクロウ……この前一緒だった奴な。あいつはよく埋めるのを忘れる。悪い癖だ」

カラスは乾いた笑みを浮かべ、さっきの煙草の吸殻をひよいと持ち上げると灰になった方とまじまじと見つめた。

「問題にならないのか」

「おい、あんまり詮索するなつつつたろ」

足元にカラスが持っていた煙草の吸殻が転がる。カラスの口調は今までとは違った、こわばったものになっていた。

カラスは興醒めしたようにグラスを煽りながら、空で手を払う動作をした。

「場所はさっき言った通りだ。気が向いたら来い」

それは彼の最後の誘いだった。僕は彼の同情心に対して何かしら返す必要があると感じたが、何かを言う前に、いつの間にか隣に立っていた二人の男に肩を押さえられた。僕はそのまま長い地下街を通り抜け、例の路地の曲がり角まで送り返された。もうあたりは日が沈み始めていた。「買い物」をさせられずに済んだ分マシだった。そんなことになればいくらなんでも後味が悪すぎるだろう。

帰り道はよく覚えていない。気が付けば僕の足は例の居酒屋に向かっていた。お酒は得意じゃない。店を梯子するのは初めてのことだった。

「ジントニックを」

僕がそう言うとミドリさんは不思議そうに僕を見返した。

「今日はタカヒコは来ませんよ」

「ええ、大丈夫です」

僕はさっきカラスから聞いた話をタカヒコに伝えるべきかを悩んでいた。ミドリさんがタカヒコとどんな関係にあるのかはよく分からない。タカヒコが僕と話している時、彼女が傍にいても全く気にするそぶりを見せなかった。少なくともタカヒコが心を許している人間であることは確かだった。僕は出されたジントニックに口を付けてただ時が過ぎるのを待った。時間は何も解決してくれない。そんなことは分かり切っていたのに、僕はまだ下らない期待を捨てきれないでいた。伝えるべきだとは思った。ただ、リスクがないわけではない。むしろ安寧を願うのであれば、黙っている方が何倍も得だった。

「私、今度実家に帰るんです」

ジントニックの氷が溶けて終わった時、ミドリさんが声を掛けてきた。さっきまで遠くの方に座っている客の愚痴に付き合っていたので、僕はつきりこのまま話すことはないと感じていた。

「この店は？」

「閉めるつもりです」

小声での内緒話のように彼女は言った。僕もそれに合わせて小さくそうですかと返した。こちらの内緒話と対照的に遠くの男二人の盛り上がりが店内に響き渡る。その二人は、アイ

ンランドの「肩を竦めるアトラス」が如何に素晴らしい哲学を持っているのかを語り合っていた。都会貴族のような中年二人だった。身なりからして、たぶん会社の社長か何かだと僕は思った。

「夢を見ていました」

ミドリさんの目は僕越しにどこか遠くを見つめていた。

「うんざりしていたんです。実家が『引き取り所』だったので、私は現実を知るしかなかったんです」

ミドリさんの言う「引き取り所」とはいわゆる私設の孤児院だった。愛されなかった人間、しかし利用価値が生まれるかもしれない人間の養成所だ。カラスと僕が育った場所だった。だから、彼女の言う「現実」がなんとなく分かってしまった。

「都会に来たら何か変わると思っただけです。でも現実がうまいきませんね」

ミドリさんは困ったように笑みを浮かべた。彼女もまた地図を失くした旅人だった。誰も皆そうだった。人間には価値の有無があつて、生産性を生み出せるものは尊く、そうでないものは醜い。そういつた論理の歯車が人間の生きる意味を砕いていく。その様子をただただ見つめながら、僕たちは何かを訴えることもなく、ここではないどこか別の世界を夢想した。歯車のない、自分の生きる意味を見つけられる場所。そんな場所はどこにもないと知っていたはずなのにどこか夢を見させてくれる場所を探していた。

「みんなどこにも行けないのは知ってるんです。でも探したくなる。それは仕方ないと思います」

そう言つて僕はすっかり薄くなったジントニックを一気に飲み干した。

「でもタカヒコは違った」

ミドリさんは自分で作つたらしいカクテルを自分で飲んで、そしてこちらを見た。彼女の笑みは仕事柄というよりは、彼女の経験によつて出来上がったものなのではないだろうか。彼女は曖昧な笑みを浮かべることで現実から逃れようとしていたのかもしれない。そう思うくらい彼女の笑みは誰に対しての笑みなのか分からなかった。

「彼は立ち向かうことを選んだんです」

僕は空になったグラスを見つめて言った。ミドリさんは何かを言おうとしてやめると、一瞬の間の後、笑顔を作つて口を開いた。さっき言おうとした何かを頭で置き換えているようだった。

「彼は何よりも今を生きようとしてますから」

それだけ言つと、またカクテルグラスを揺らして店内を見渡した。

「こんなことを訊いては失礼かもしれませんが、ミドリさんはタカヒコとどんな関係なんですか」

僕が早口で気になつていふことを訊くと、ミドリさんはきよとした表情で私にもよく分かりませんと言つた。先ほどの社長らしき二人の人物がお互いのビジネス哲学を語り合つているのが聞こえてくる。

「彼はあなたを信用しているようでした」

僕がそう言っても彼女は表情をピクリとも動かさなかった。

「でも信頼はされてません。彼は肝心なことは私に話してくれませんから」

早口で声のトーンも低かった。一瞬だけミドリさんの顔から笑顔が消えたように感じた。「それはあなたを巻き込みたくないからだと思います」

僕がそう答えると、ミドリさんはそうでしょうかと曖昧に笑うだけだった。彼女は一瞬の逡巡を見せてから実家の話を始めた。

「助成金が出るんです。勿論、いろいろと税金対策は講じないといけないわけですけど、今ずっと働いていた職員が揃って退職することになったので人手が必要なんです」

「なんでそんな話を僕に？」

「初めは彼を援助する目的でした。でも彼は貴方の方がそういう場所を必要としているからと」

どうやら、ミドリさんは僕が仕事を失つてもいいようにこの引き取り所の職員の仕事を用意しているようだった。それもタカヒコの指示によって。僕なんかよりタカヒコの方が遥かに背負っているリスクも理想も重かった。にもかかわらず、彼は自分より先に僕が逃げられるようにミドリさんに指示したのだ。なぜそこまで彼は出来るのか、何が彼をそうさせるのか、僕は知らないフリをし続けるつもりでいた。

「時々怖くなるんです。自分はこのままでいいのか、本当は何かしなくちゃいけないくて、本当にこれでいいのかって」

ミドリさんは何も言わないでただ僕の言うことを聞いていた。聞いているのかいないのか、そもそも聞こえていないのかは分からなかった。ただ、僕は自分の中にある嘔吐感のような自意識を吐き出さずにはいられなかった。

「僕はもつと考えて青春時代を過ごすべきでした。何に従うべきか、何に抗うべきか、漠然とでも考えるべきでした」

もう自分でも何を告白しているのかすら分からなかった。

「タカヒコに伝えてください」

僕はそう言ってなんの脈絡もないままに、タカヒコの身に危機が迫っていることを伝えた。カラスのことは言わなかった。タカヒコが次に情報の取引に行く時には気を付けて欲しいとだけ言った。タカヒコなら気が付くはずだった。そこまで聞いてミドリさんは一瞬驚いたものあまり動揺した様子を見せなかった。ミドリさんはただ「でもタカヒコは行くと思います」とだけ返答すると、先ほどの社長二人のお勘定を済ませるためしばらく離れていった。二つ席を隔てた男の声がやたらと明瞭に響く。劇団とかアナウンサーとか、そういった仕事だろうとは思ったが内容は不思議と何も覚えていなかった。その人たちも帰っていくと、もう店内には僕以外の客がいなくなっていた。ミドリさんと僕だけになったカウンター席で、僕は自分の口が動くままに言葉を吐き出していた。

「僕は卑怯な人間ですか」

自分でもなんでそんなことを訊いているのか分からなかった。ただ、気が付けば僕の口は消え入りそうな声でそんなことを呟っていた。やっぱりなんでもありませんと僕は付け加えるとグラスに視線を落とした。ミドリさんは初め何を言われたのか分からない様子だったが、しばらく沈黙してグラスを拭く手を止め、口を開いた。

「それを訊いたとして、あなたは――」

そこでミドリさんは口を噤んだ。お酒を飲むくらい忘れましょう。他の客にそうするのと同じように、彼女は僕に笑いかけた。それから僕が覚えていることといえば、グラスの氷がカラカラと鳴る音くらいだった。気が付けば僕は帰路についていた。全くぼかしていた。僕は一体なぜあんな無意味な問いかけをしたのだろう。いつそ、はいそうです。貴方は卑怯ですと言われる方がまだ救いがあった。

「あなたはどんな言葉をかけて欲しいのですか」

彼女がもしそう言おうとしていたのならどうしただろう。それは想像でしかなかったが、僕にはその言葉がタカヒコの言葉と重なって聞こえた。

僕が彼女に気が付いたのは、リビングの電気を付ける直前のことだった。数週間前にいなくなつた少女だった。彼女は膝を抱えて背を丸めながら、こちらをぼーっと見つめていた。その目に僕は映っていなかった。ただドアの方を見つめていたようだった。数週間前に出ていった時と服は変わっていない。少しくしゃくしゃになつた程度だろう。

「お前」

驚いて声を掛けると、彼女は虚ろな目を少し上げて、やっところらの存在を認めたようだった。電気を付けてもう一度彼女の様子を確認する。

「ちよつとおながすいた」

彼女はこちらを見てそれだけ言うと、緊張で震わせた肩を下ろしてまた座り直した。

「ちよつと待つてろ」

僕はそれだけ言つて何か作れるものはないか冷蔵庫を漁つた。冷凍食品とパン、それから野菜炒めの残りりとトマトペースト、後は調味料だった。それを取つてしまうと冷蔵後には冷たい空洞だけが残された。僕はパスタの束を取り出して、鍋に水を入れるとそれを熱し始めた。何を作るのと彼女が尋ねる。トマトソース、パスタと野菜炒め、後はトーストと僕は答えた。それから風呂入つてないなら使つていいよと僕が言い、あっ、そつかと彼女は部屋を出ていった。

「いただきます」

適当に夕食を作つて食卓に向かい合う。僕らはしばらく無言でパスタやトーストや野菜炒めを食べ続けた。

「なんで」

しばらくして彼女が手を止めて呟いた。

「ん、何だ。水か」

僕がそう訊いても彼女は何も答えず、困惑した表情でこちらを何度か見るだけだった。僕は何も言わず柵からグラスを取ってくるそこに水を注いで彼女に渡した。ついでに自分の分のグラスも取って水を注ぐ。

「何も訊かないんだね」

水を注ぐ僕の背中に彼女はそう投げかけてきた。

「訊いたら答えられることなのか」

僕は食卓に戻って彼女を見た。彼女はただぼーっと窓の外を見つめるだけだった。外では冬の雨が降り始めている。僕が黙って水を飲むと彼女はぼつりぼつりと語り始めた。

「ねえ、貴方は希望ってどんなものだと思う？」

トマトソースがパスタがフォークに絡まっていく。パスタとパスタの間から、トロっとした赤いソースが滑り落ちていく光景を眺めながら、僕は一度フォークを下ろした。

「なんでそんなことを聞くんだ」

「あるとしたらそれはどんな形をしてると思う？」

フォークでクルクルとパスタを巻きながら彼女は呟いた。

「さあ、そんなのは神様だけが知るんじゃないか」

僕はちよつと考え込んでから、やつぱりフォークを口に運ぶとそう答えた。口の端からこぼれそうなソースを拭くために、テーブルの淵にあつたティッシュ箱からティッシュペーパーを引き抜く。

「じゃあ、私たちはきつと知る由ないんだ」

引き抜いた勢いでティッシュ箱までこつちに滑り込んでくる。一瞬彼女の視線が動いたがまた元の位置に戻った。

「そうだ。僕たちは知ってもいないことをただあるって信じてるんだ」

僕は口元をティッシュを拭いて答える。

「未来の為に？」

そう言つて笑うと、彼女は長い間バレエダンサーのように回り続けていたフォークを止めて口に運んだ。

「そうかもしれない」

僕は自分の皿を空にするべく、残ったソースと短いパスタを丁寧にフォークで掬って口に運んで行った。巧く掬わないとそれらはフォークの指の隙間からずりりと抜け落ちてしまう。

「じゃあきつと希望なんてないんだわ」

彼女はフォークの隙間から零れ落ちてしまうソースをつまらなそうに見つめながら、何度もフォークを上下させていた。

「それでも信じるしかない」

僕は赤い汚れの残つたお皿を流しへと運んで行った。彼女もしばらくしてフォークを置き、スプーンで皿の中身を丁寧に掬うと、小さくごちそうさまと言う。僕は彼女からお皿を受け取ると、付け合わせのお皿も回収して洗い場へと運んで行った。

「私ね、本当は父親を捜しに来たの」

僕が食器を洗い始めると、彼女は流しの音にかき消されないギリギリの声の大きさでそう言った。

「そうだったのか」

僕は受け答えつつ、皿を洗い続けた。

「でも、見つからなかった」

少し水を流す量を抑えて、洗剤を付けたスポンジで食器を撫で始める。

「見つかったのは死体だけだった」

僕は一旦食器を洗う手を止めた。多分、その方が良かった。そうするべきだと思った。食器はしばらく洗剤に浸して置けば良かった。

「そうか」

出て来たのは何の慰めにもならない相槌だけだった。これまでの生活で、僕は考えるべきことを考えてこなかった。その代償として僕の口は、言うべきはずの言葉たちを何も貯蓄してこなかった。あの死体は彼女がやったものではないのだ。

「本当は恨み言ぶつけてやるつもりで来たのに、全部無駄になっちゃった」

彼女はそう言って顔を伏せた。僕は彼女がああ死体に対して抱いていたのは興味でもなんでもなく、ただの呆れと途方もなさだったことに気が付いた。

「母親は病気で死んでしまったから、もう私には家族がないの」

彼女は依然窓の外の雨を見つめながら、段々と弱くなる声で喋り続けた。

彼女は捨てられたわけではなかった。彼女の父親は何かの事情で殺されたのだ。母親も病気で死んでいる。そして、彼女は本来いない存在としてこの世界にいた。これが一体何を意味するのか。僕はそこで一つの想像をした。あの死体は彼女の父親の死体で、彼女は捨てられて回収されたわけではないとすればそれはあり得る話だった。

「もう逃げるのやめようかな」

彼女は力なく、肩を揺らしながら笑った。

「逃げる場所ならある」

僕はミドリさんの言っていた引き取り所の話を思い出していた。あそこならあるいは、政府の監視の目が緩いかもしれない。

「へえ、見つけてきたんだ」

彼女はまるで興味が無い様子で自分を無理やり笑わせていた。

「違う、たまたま知っただけだ」

「でも、もういい。疲れちゃったし」

彼女はもう一度窓の外に目をやった。もう何もかも諦めているようだった。それを受け入れていようでもあった。

「まだ歩けるだろ」

僕の推測が正しいとすれば、彼女の持つ絶望は相当のものはずだった。それはもはや彼

女一人だけで背負いきれるものではなかった。

「ねえ」

「何だよ」

「私、アスカって言うの」

唐突に、少女はアスカと名乗った。それが僕には飛鳥なのか明日香なのかは分からなかったが、とにかく彼女はそう名乗った。

「そういえば名前聞いてなかったな」

僕はため息をつくように彼女を見た。

「貴方が私を買ってよ」

「お前は疲れてるだけだ」

「そうかもしれない」

「そうなんだよ」

「貴方ならいい気がする」

「もう寝ろって。ろくに寝てなさそうだから」

僕はそう言っていると、踵を返して二階から毛布を持ってこようとした。彼女はそのまま動きそうになかった。十分な温かさの毛布が必要だと思った。

「疲れた」

僕の背中に彼女が投げやりな声をぶつける。いや、それはぶつけるといふほどの力さえなかった。ただ闇雲に投げ出された言葉がぶつかってきただけだった。

「そうだな」

「疲れたよ」

彼女はそれだけ言って泣き始めていた。僕は二階に行つて毛布を取つてくると、彼女に毛布を掛け、洗い物をそのままにココアを作ることにした。冬の雨が地面をたたく音は、彼女のすすり泣く声をかき消すように強くなつていた。僕はそんただ彼女の声を聞き漏らしてはいけない気がして、ただ耳を傾けていた。

彼女の両親は彼女の名前にどんな願いを込めたのだろう。彼女の存在にどんな希望を託したのだろう。僕が逃げればまた同じことが繰り返される。確かに、天敵に怯える小動物のように彼女と静かな暮らしを望むことは出来るかもしれない。でもそれは静かに窒息していくことと同じだった。

「自分で言うのが一番卑怯だ」

「それを訊いたとして、あなたはどんな言葉をかけて欲しいんですか」

僕はまたそんな言葉たちを思い出ししていた。彼女の傍に湯気が立つココアを置き、隣に毛布の束を置いた。それから自分も寝支度をしてリビングの床で眠り始めることにした。彼女はまだ膝の上に顔を埋めている。僕は何も言わなかった。慰めの言葉なんて今は意味がなかった。絨毯の上で毛布にくるまって寝ると、雨の音が床を伝わり体に染み込んでくる感じがした。

朝目を覚ますと、置手紙を一つ残して少女はいなくなっていた。そこにはしばらくいなくなる。それからまた連絡する旨が主に書かれていた。それ以外のことは置手紙の最後の方に書かれていた。ところどころ漢字が開かれていて読むのには少し時間がかかったが、しっかりと綺麗な字だった。

「みんな、あまりにも多く、景色を忘れてしまった。これからもきつと忘れていく」

その夜僕はまたあの居酒屋に向かった。この前聞いた話では今日はまだ閉店していないはずだった。店の近くの路地はいつものように静まっていた。かつては電飾看板やスタンドの光がないだけで路地はさらにその気配を消してみせていた。暗い路地に浮かぶ一筋の光が見える。店の中から明かりが漏れているのだ。ドアには本日閉店と書かれていたが、僕はそれを無視して入店の鐘を鳴らした。

タカヒコはまたいつもの席にいた。僕は黙って隣に座り彼を見たが彼は何も反応を示さなかった。今日はギムレットを飲んでいようだった。

「伝えておきました」

ミドリさんは静かに微笑みながら、ご注文は、と続けた。

「ギムレットを」

僕はそう告げると再び隣のタカヒコの方を見た。

「警察に助け求めたって無駄なんだ。基本はグルだからな。たとえグルじゃなくても警察権力ってのは俺たちを嫌うのさ」

タカヒコはこちらを全く見ずにそう言った。タカヒコの声は、独白を観客のいないステージで放つような調子だった。

店内は僕たち以外に誰もいない。僕とタカヒコだけが今日までやっていることを知っていたのだ。

「逃げることで出来たはずだ」

「逃げ続けられるほど賢く生きてない」

タカヒコは目を細めながらまたギムレットに口を付けた。彼の言う賢さは今ならなんとなく分かる気がした。現実を受け入れること、ただ諦めること。正しいかどうかは置いておくにしても、それは正解ではあるのだ。でも彼はそれを選べないでいた。ミドリさんが運んできたギムレットのグラスを揺らして、もう一度彼を見た。

「なあ、一つ聞きたい。僕のような事例は多いのか。人身売買の買い手が裏組織じゃなくて一般人であることなんてあるのか」

「それを知ってどうする」

彼はようやくグラスから目を離してこちらを見た。自分が死地へと向かうかもしれないという時でさえ、彼の眼光は鋭さを失っていなかった。僕には真似できない。でもそこから目を背けるべきではないことも分かっていた。

「知りたいんだ」



僕はもう一度、強く彼に言い放った。

「お前は別にレアケースじゃない。悪さをするのが裏組織だけなんていうのは映画や小説だけの話だ。みんな表ではいい顔するし、裏では何やってるか分からないのが普通だ。凡庸な悪だつてあるのさ」

彼は一瞬押し黙ってからそう回答した。彼も僕の目の中を覗いているようだった。

「分かった。礼を言うよ」

僕はそれだけ言っただけでグラスの半分までギムレットを飲んだ。

「お前はどうするつもりだ」

彼は空になったグラスをカウンターの奥へとやってミドリさんとアイコンタクトを取った。

「僕は君の様にはなれない。少なくとも今は。でも、何かやらなきゃいけない気がした。それだけだよ」

僕は考えた末にそれだけ答えた。

「そうか」

彼が胸ポケットを探りいつものように煙草を取り出すと、僕はそれに合わせてポケットからライターを取り出して彼の目の前で火を付けた。彼は僕を見てニヤリと笑うと煙草を啜えたまま顔を火に近づけた。

「君は希望を信じるか」

彼が煙草に火を付けたのを確認すると、僕はそう言ってライターを閉じて手元に戻した。

「そんなもの考えてどうする」

彼は僕の方を奇妙なものを見るようにして鼻で笑った。

「やるかやらないか。もしやるなら今しかない。それだけだ」

そう付け加えると、彼はギムレットを飲み干した。

「行くのか」

「ああ、腐らないうちにな」

彼は僕の問いに素っ気なく答えると、煙草を啜えたまま上着を羽織った。

「君の名刺をくれ」

彼は僕を見下ろして、僕は彼を強い目で睨んだ。店内の光が目に滲む。それでも目を閉じまいと彼に視線を送り続けた。

「表の方じゃない」

彼が黙って肩を揺らして羽織った上着を合わせるだけだったので、僕はそう続けた。彼は一度煙草を外し煙を吐き出すと、メモ帳を取り出して何かを書き込んだ。そのメモを切り離してこちらに寄越すと「デジタル管理は危ないんでな、失くすなよ」とだけ言って彼は去って行くとした。僕はさよならを言わなかった。彼も何も言わなかった。

カラスとの約束はもう前日まで迫っていた。そしてタカヒコの賭けも、僕の決断もそうだ

った。その日の夜は数日続けての雨だった。だから、家の固定電話に一本の電話がかかってきた時も僕は何も考えることなくそれを手に取った。もう現代では使われずインテリアくらしいの価値しか持たないその埃を払いながら、僕は電話に出た。

「どうするか決めてくれた？」

アスカの声だった。

「アスカか」

僕は彼女の声に混じる雨の音を聞きながら彼女が外に居ることを理解した。

「公衆電話からかけてる。もうこの町には一つしかないんだって」

彼女は自分の何かを隠すような調子で陽気にしゃべり始めた。

「通信機器は携帯できる時代だからな。公衆電話なんてもう誰も使いやしない」

僕もそれに合わせて、淡々と日常会話のような意味のない応答を返した。

「たぶん、この景色も後数年で消えちゃうんだよね」

彼女はジェネレーションギャップってこういうことだよな、と陽気に言った。

「今の子供なんて公衆電話って言葉さえ知らなそうだな」

僕はそう言いながら、家の外で聞こえる雨の音と彼女の声に混じる雨の音がコーラスのように反響しているのを聞いていた。

「いずれ何もかも忘れ去られちゃうんだろうな」

僕は彼女の声を聞きながら固定電話の子機と親機の間あたりに導線があることを想像した。その想像上の導線を振るるように手を動かしても、それは全然振じれた感じがしなかった。

「それは君自身のことを言ってるのか」

僕の返答にそれまで陽気に喋っていた彼女はただ沈黙した。

「君は忘れられてしまったと言った」

僕は雨の音しか返さない電話機に向かって続けた。

「そうね、この子と一緒だよ」

彼女は公衆電話のことを「この子」と呼んで笑った。電話越しにももの同士が擦れる音が混じっていた。彼女が公衆電話を死にかけのペットのように撫でているのだと僕は思った。

「一度回収された人間は記録上死んだことになる」

僕はタカヒコから言われたことを思い出しながら話を続けた。

「そうね」

「でも君自身は回収されていない。そうだよ」

僕は彼女のことについて、彼女が言わなかったことに対して踏み込んでいった。

「……そうね」

沈黙の後に、観念した彼女の声が聞こえる。

「一度回収された人間は生活すらこの世界から認められない。そこには希望すら抱けない。君が言いたいのはそういうことだよ」

僕がそう言うと、彼女はまた僕に雨の音を聞かせた末に喋り始めた。

「私の母親は回収されて売られたの。それを父が買ったんだって聞かされた」

彼女が喋る速度は、降り始めの雨より遅かった。僕はただひたすら、相槌さえ打たずにそれを聞いていた。

「別に父はひどい人間ではなかった。臆病だったけど、優しくかったってお母さんが言っていたから」

「それで二人は君を産むことにした」

「一度回収されれば、当然でない人間になってしまう。いない人間の子供も当然いない扱いになる。そんなこと二人とも分かっていたはずなのに」

彼女は少し悔しそうに、少し嘲笑うように声を震わせた。

「臆病な人間は時に希望を見なくなる。その未来に自分達を託してしまいたくなるんだ」

言いながら、自分の歯を噛みしめていることに気が付く。埃っぽい電話機が汗で滲むほどに僕の手には力がこもっていた。

「そんなことしてもまた同じことの繰り返しなのに」

彼女は幾分か陽気さを取り繕おうとしていたが、それでも僕が出した答えにまだまだ動揺していたようだった。

「希望は時に人の目を眩ませる」

「じゃあ貴方はどうするの」

「君とは一緒にいられない」

「どうして」

彼女は僕がそう答えることを知っていたからか、少し落ち着きを取り戻していた。

「君には逃げ込める場所がある。それを教えるよ」

僕はミドリさんから聞いた引き取り所について彼女に教えた。彼女は最初黙ってそれを聞いていたが、メモを取るからもう一度ゆっくり言つてと要求したので、僕もそれに答えた。

「貴方はこれからどうするの」

一通りのことを伝え終わると、彼女は以前のような無邪気さでそう訊いてきた。それが何かを隠すための彼女の演技かは僕には分からなかった。でもそれで良かった。

「僕にはまだやらなきゃいけないことがあるんだ」

僕はさよならを言いかけて、やめた。

「そっか」

彼女も何かを言いかけたが、そこから先が続くことはなかった。電話はそこで途絶え、降りしきる冬の雨がまだ窓を叩く音だけが残こされた。

翌日僕はタカヒコが死に、カラスは捕まったことを知った。カラスはトカゲのしっぽのように切り捨てられたのだ。だが、彼のことだ、また戻ってくるに違いなかった。フクロウはどうなっただろう。彼はおそらく僕のことを歯牙にもかけないだろう。きっと忘れているは

ずだった。でもこれからはどうなるか分からない。今度は彼が僕を殺しに来るかもしれない。もしくは僕がうまくやるかもしれない。

僕はタカヒコのメモに何度も目を通して、連絡先を覚えるとそれをライターで火で焼き捨てた。これからの仕事はただ生きるための糧ではない。たとえ誰が忘れようとも、その痛みを記録する。忘れない。忘れてやるものか。僕は濁った声を冷めたブラックコーヒーで流し込むと仕事へと向かった。